

治療関係における自然治癒概念についての考察

—野口晴哉を中心にして—

立命館大学大学院

応用人間科学研究科

臨床心理学領域 高垣ゼミ

中間有紀

自然治癒力は、一般的には、傷ついた体を自然に修復させる作用に見出せるが、すべての病気に対して働いているのかを実感することは難しい。そこで本論文では、治療家野口晴哉の実践と思想をみてゆくなかで、自然治癒という概念がはたして心の病に対して有効なのかを考察する。

明治から昭和にかけて、現在の整体の基礎をつくった野口晴哉という治療家がいた。彼の根幹には「全生思想」という、いのちへの全幅の信頼からなる思想が存在する。それは、人々の心を外から縛り萎縮させるものから解放し、いのちの要求に従って生きることを促すものであった。

一方、現代に神田橋條治という精神科医がいる。彼は、自身の治療経験の中から得た主観的なイメージや感覚を独自の論理によって説明し、その働きをこまかく分析した著書『「現場からの治療論」という物語』を記した。両者共に、病人の治療に最大の重点を置く臨床家であり、非常に近接した世界観を有する。そこで、神田橋の論理を使って、野口の発言の数々を読み解いた。

自然治癒力の働きは治療者と病人の関係性の状態によって、正しく機能することもあるが、誤って機能することもある。自然治癒力が最も正しく機能するのは、病人の心と体の連絡と関係が円滑に進んでいる時であり、機能しない、あるいは誤って機能するのは、心と体の連絡と関係が円滑でない時である。自然治癒力が誤って機能すると病気がかえって悪化する可能性がある。

病人の心と体の連絡と関係を円滑にするためには、病人と治療者の関係性の中に発生する双方の余計な心情を取り除く必要がある。それは、治療者にとっては治療結果への虚栄心や、自己の実績への過信などによる雑念であり、この雑念が大きくなると病人の体の正確な状態から目を離す結果を生む。病人にとっては病気への不安であり、不安が増大することによって治療者への過大な依存心が生まれ、また不安に集中することで自らの体の正確な状態に目を向けられなくなる結果を生む。

野口は長い治療経験で、この事態に何度も遭遇し、結局は治療者と病人の関係性を問題視し治療者としての立場を捨てる。神田橋自身はこの事態への解決策を具体的には述べていないが、その論理を発展させることにより、病人の不安の暴走は病人の話す言葉にまずその兆候が現れることが推察され、言葉、とりわけ対話の重要性が示唆される。つまり、病人の語る言葉に細心の注意をはらうことによって、病人の不安が暴走する危険性を防ぎ、病人の持つ自然治癒力を正しく発揮させることが出来るのではないかという提案を示せる。

ここでカウンセリングに目を向けると、カウンセラーは対話を唯一の道具としてその活動を行う。そのことからカウンセラーは他のどの立場の治療者よりも、心の病に対して自然治癒力を期待すべき、あるいはその期待を許された存在なのではないかと、強く考えるのである。